

# 独話的対人発話の研究

——ポライトネスの観点から——

吉野和美（創価大学助教）

## 要 旨

日本語母語話者どうしの会話では、形式上は独話であるにも関わらず、実際の機能として聞き手に働きかける発話が見られる。本稿では、形式上は独話であるにもかかわらず聞き手を意識して発話された発話を「独話的対人発話」と呼称し、形式上も意味上も聞き手に向けた発話や全く聞き手を意識しない発話のどちらも異なるものとして機能していると仮定した。さらに、それらの表現を形式・機能別に分類し、テレビ番組の会話やコーパスをもとに例を収集し考察したところ、形式上は独話であるにも関わらず聞き手目当て性を持ち、様々なポライトネス・ストラテジーとして機能していることがわかった。

キーワード：独話、対人発話、発話機能、ほのめかし、ポライトネス・ストラテジー

## 1. はじめに

次に示す会話(1)は日本語学習者 A と日本語母語話者 B の間で実際に起きたものである。B は「一緒に帰ろう」もしくは「一緒に帰ろうと切り出してほしい」という思いで「もうそろそろ帰ろうかな」と発話したが、A には伝わらなかった。

(1) (学内で遅くまで勉強している院生 B を気遣って、院生 A が声をかけた際)

A：まだ帰らないの？

B：うーん、まだ課題があるからなあ。どうしようかな。もうそろそろ帰ろうかな。

A：そう。じゃあもう帰るね。気を付けて。

B：A も気を付けて。

後日、A になぜ先に帰ったのか訊ねたところ、「課題があるから迷っているのだと思った。時間が掛かりそうなので誘わなかった」と説明した。このことから、日本語母語話者が用いる独話形式での意思表示は非母語話者との間にミスコミュニケーションを生じさせるのではないかと仮定した。本研究ではこれらの発話を「独話的対人発話」と名付け、発話機能を持つ独話形式の発話であるにとらえ、分類と考察を試みる。

## 2. 先行研究

独話的対人発話に関わる形式の言語表現を取り上げている先行研究を整理し、独話形式の発話も対人機能を持つことを明確にする。先行研究のうち、独話形式の発話が対話場面でも使われること、また逆に聞き手意識が強いとされる終助詞が対話場面で使用されるとしているものに、中川・小野 (1996)、中崎 (2002) がある。そこでは、発話形式によらず、分脈や発話意図によって終助詞が独話場面でも用いられることが説明され、独話と対人発話が言語表現によってのみ判断されるわけではないことが述べられている。また、(1993)、(1998)、Usami (2002)、三牧 (1993) などで、敬体から常体へのスピーチレベルシフトに

触れている。その中で、これらの例を含めたスピーチレベルの混用について、意識的・無意識的に行うことで、コミュニケーションをスムーズに進め、人間関係を円滑に保とうとしているのであり、Brown & Levinson (以下 B&L) の Politeness の一種のストラテジーであると述べている。られているが、そのうちのいくつかは独話的対人発話にあたる。ここでは、心内発話の音声化を独話と位置づけ、聞き手存在場面で聞き手を意識して発話された発話がどのような対人的機能を持つかについて言及したものを整理する。

### 2.1. 三牧 (1993) (2000)

三牧 (1993) は、スピーチレベルシフトにみられる独話の挿入について、良好な人間関係のもの独話の挿入がみられるのに加え、0 レベル<sup>(1)</sup>の使用が、心的距離の短縮という機能と併せて、談話展開標識の機能も果たしていると考えられると考察している。

三牧 (2000) は、これらの発話が「わきまえを示しながら丁寧体の堅苦しさを緩和し、話者間の距離感を縮小させ、和やかにコミュニケーションを遂行するための非常に巧妙なポライトネス・ストラテジーとして機能している」と結論付けている。そのうち、FTA 補償ストラテジーとしての独話的発話の用法を、「相手に直接向けると FTA になる恐れのある内容を発話する場合、独話風に発話することで FTA を補償していると思われる用法」「思考過程の音声化に比べ、意識的に発話している」「相手への間接的な質問となる」とまとめている。

#### 【例 4】

(学年と年齢が合わない女性に対して、男性が)

NS 後方に大きくのけ反り、上を仰ぎながら あれ、若いなあ。何でやろ。

NNS ふふふ。

NS 22?

この会話では、男性が年上の女性の年齢に言及し間接的に尋ねようとしている。場面としては FTA になることが予想されるが、聞き手から視線を外し、独話的形式で発話されたことで、直接問いかける要素は薄れているものの、その後も会話の目的を達成しようと働きかけている。女性は年齢に言及されたにもかかわらず、「ふふふ」と返すのみにとどまっている。このネイティブスピーカーの発話意図についてフォローアップインタビューしたところ、「質問をほのめかすことで、相手が意図を察して答えてくれることを期待した」「敬体から常体にすることで距離の近接化をはかった」といった回答があり、他の発話例も併せて得た回答から、独話的発話の機能を①FTA 補償ストラテジー、②談話管理、③心的距離の接近の3点にまとめている。

### 2.2. 池谷 (2012)

独話的発話という観点に注目して論じているものに、池谷 (2012) も挙げられる。池谷は、終助詞「っけ」「っと」を用いた表現の独話的用法に注目し、その機能を分析した。

#### ① 「ッけ」の形式を用いた聞き手存在場面での独話的発話

聞き手有：同僚に芸能人について尋ねる

A: 大島優子って、東京出身だっけ？

B: 横浜じゃなかった？

② 「ット」を用いた聞き手存在場面での独話的対人発話

聞き手有：(友達のクラリネットを勝手に触っていたら、部品が取れてしまった。)

A: わあ。壊れちゃったよ。どうしよう？

B: 知らないっと。

池谷は、これらの発話の機能を次のようにまとめている。

①聞き手を invisible listener として扱うことで、聞き手はその発話に対して何らかのアクションを起こす義務から逃れられる。

②たまたま聞き手が協力的であれば話者と聞き手のインタラクションが生まれ、協調的な会話が生まれる。しかし非協力的な聞き手として無視していても、人間関係には影響しない。

池谷は、質問する、許可を求める、意志を表明するなどといった FTA になる可能性のある発話を意図的に独話形式で発話して聞き手意識を弱めることで、会話に応じる義務を聞き手に委ねており、FTA を緩和あるいは回避できると結論付けている。

### 2.3. 先行研究のまとめと問題点

先行研究では、形式上は独話であっても、聞き手を意識して発話されるものがあること、また、それらが配慮表現等のなんらかの聞き手に対する配慮や働きかけ機能をもつことが指摘されており、独話が従来の認識とは異なる機能を持つ、つまり形式も意味上も独話である「独話」と、形式は独話でありながら対人機能をもつ「独話的対人発話」に分けられることを示している。しかし、いずれも特定の表現形式や状況に沿った考察にとどまっております、幅広い「独話的発話」全体を、配慮表現の観点から考察・議論したものは管見の限り存在しない。本研究では、具体例をもとに独話的発話を総括的に考察する。

### 3. 本稿で用いる独話的対人発話の条件と研究方法

本研究では、収集した用例をもとに、考察対象を次の条件に該当するものに限定する。

#### 【独話的対人発話の条件】

- I. 終助詞・副詞・形容詞（形容動詞）語幹・動詞・名詞を用いた発話のうち、相手から視線を外す、前後の発話と声の大小が変わる等、話者の発話態度から独話とみなされうるもの
- II. Iのうち、聞き手が存在する場面で発話され、形式上は独話（常体で発話されたもの）であっても発話内容から聞き手を意識しているということが判断されるもの
- III. 下降調イントネーションを伴うもの
- IV. 聞き手を意識した人称代名詞が使われているものを除き、上記に当てはまる形式の発話

本研究では、これらの条件をもとに比較的自然と考えられる、つまりシナリオがないとされる、もしくは大まかな流れのみが決まっている台本をもとに進行する番組・ドラマを中心に会話データを収集した<sup>(2)</sup>。具体的に、まず文法カテゴリーから独話的対人発話の

分類を試みる。さらに、独話的対人発話に該当する発話に山岡（2008）の観点から発話機能のラベリングを行い、独話的形式であっても対人機能をもつことを客観的に示し、ポライトネス理論の観点からどのようなストラテジーとして機能しているか、考察を試みる。

#### 4.1. 文法形式上の分類と分析

独話的発話の機能を考察する上で、まずは便宜上、文法形式上に分類し、それぞれの機能を考察していく。

##### 4.1.1. 自己確認型

終助詞「か」が上昇イントネーションで文末に用いられるのは、日本語の疑問文の典型的な形である。下降イントネーションになると納得の意味を表す。

(2)彼は学生ですか↑。(疑問)

(3)（そうか。）彼は学生か↓。

それに対し、独話的対人発話としての終助詞「か」は、①命題内容に対する話者自身の疑い・疑問を述べ立てる形式であり、発話者は知り得ない情報について自問形式で述べることで間接的な情報要求として機能するものと、②話者自身にとって不確かな情報について述べるものの二種類がある。前者は(4)のような発話が例として挙げられており、前者はポライトネス・ストラテジーとして用いられているが、後者は話者自身にとって不確かな情報を想起している用法である。

(4)（番組の内容に関して説明を受けた後、撮影に向かう場面。三村は誰が収録に来るのか知らされておらず、確認しようとしている場面で、アナウンサーに背を向けた状況で発話している）

三村 大江居んのかなあ。 《情報要求》

アナウンサー （無言で移動する）

三村 あ、大江いるかどうかもう答えない。

（一同笑う）

（モヤモヤ）

三村の「あ、大江がいるかどうかもう答えない」という発話から、「大江居んのかなあ」という発話が「大江という人物が来るかどうか」という情報を要求するための質問だったことがわかる。終助詞を使った自問形式での質問は、聞き手が疑問に答えるかどうかは聞き手に委ねられる。聞き手が質問に答えず無視するあるいは情報を与えないという対応をしても、疑問詞を用いた問いかけと比較して対人関係に大きな支障はない。つまり、独話形式での「質問」は、聞き手に対する情報の要請が持つ「要求」的性格を和らげており、答えるか否かの判断を聞き手に委ねているという点で、聞き手のフェイスを脅かすことを軽減するための配慮表現として機能していると言えることができる。

##### 4.1.2 意志表明型

動詞の意向形は本来、単独で発話した場合、聞き手を意識しない独り言になる。また、聞き手に対して勧誘を表すこともできる<sup>(3)</sup>。一方、ここで挙げる用法は、話者の意志を、動詞意向形を用いて独話形式で表明することで、命題に関する聞き手の行動を制限する、あ

るいは話者の意志を行動に移すための許可を得ようとする表現である。

(5) (AはBの大学院の後輩で、仲がいい。勉強の合間に雑談をしていた際、Aが時間を気にしながら勉強に戻ろうとする場面)

A: よし、勉強に戻ろ。 《承認要求》

B: 私も戻ろかな。 《承認》

(6) (親しい友人どうしで、Bの部屋にて)

A: 何これ。 ちょっと見せてもらお。 《許可要求》

B: いいけど、丁寧<sup>に</sup>扱<sup>って</sup>ね。 《許可》

この例では、《承認要求》という聞き手への要求行為を行いながら、《承認》を行うプロセスを行うかどうかは聞き手に委ねており、ネガティブポライトネス・ストラテジーとして機能している。また、(4)のように親密な関係であれば、聞き手と話し手の近接化を図るポジティブポライトネス・ストラテジーとして機能すると解釈することができる。

#### 4.1.3. 願望表出型

ここでは「動詞+たい」「Nがほしい」、仮定表現の「たら」等を用いる表現を取り上げる。この型の表現は、話し手の願望を独話形式で表出することで、聞き手の勧誘、許可を促す、間接的に要求する機能を持つものである。

A: 動詞活用(たい) + 終助詞な

(7) (同級生の友人どうしで似合う服を選びあっていて、いくつか着た後で)

F106: っていうか私、これ、これ、このタイツとりあえず脱ぎたいな。 《許可要求》

F076: うん、どうぞ。 《許可》 (名大会話コーパス)

F106の「このタイツ脱ぎたいな」という発話は、話者の願望を表出する形式でありながら、F076に対する許可要求として機能しており、依頼を行わずに目的を達成することを目指しながら、断りをしやすくする、あるいは協力の是非を聞き手に委ねている。つまり、これらの表現は、何らかの行為を要求することのFTAを緩和しながら、聴者がそれを断ったり拒否したりする許容度を持たせる表現である。

B: 仮定条件を表す「たら」 + 「いい」、てほしい、てもらいたい等 (+たらなあ)

(8) (番組中、料理の紹介をしている際、お酒にあう食事が出てきた。あたりを見渡ししながら)

マツコ: ビールないの? ビール。

ビールがあつたらなあ。 《要求》

(間をおいて、ビールが提供される) (マツコ)

この発話における独話形式は、話者の要求、ときに強い要求ととらえられがちなものを独話形式で発話し聞き手目当て性を薄めることで、聴者の領域を侵害することを回避しようとするネガティブポライトネス・ストラテジーとして用いられているものである。FTA回避のストラテジーのうち、「ほのめかし」に該当するものである。

#### 4.1.4. 評価型

この型の独話的対人発話は、可愛い、汚い、面白いなどの話者の主観的な価値を表す形

容詞類語幹で発話される。終助詞を伴うこともある。

(9) (飲み会の場で、教授の普段とは異なる意外な一面を知って)

うわー、先生かわいい！《賞賛》

(9)の例は、実際に教授と院生の懇親会の場にて、院生が教授のことを形容して発話したものである。院生の「かわいい」という発話を聞いていたほかの学生も同調して「先生かわいい」と発話したが、それによりコミュニケーションの流れや人間関係に支障はみられなかった。他者を評価することは親疎関係や社会的上下関係などの要因により FTA となる場合があるが、独話形式で発話することでその制約を受けにくくなるのであり、コミュニケーションにおいて他者との関係を良好に保つ目的で発せられたものであると結論付けることができる。

#### 4.1.5. 感情表出型

感情表出型は、次の2つの型に分けられる。

A: 話者の主観的感覚・情意を表す形容詞類語幹(嬉しい、楽しい、悲しい、悔しい等)による独話的形式の発話。終助詞を伴うこともある。

(10) (燻製製品に詳しいゲストがおすすめの商品をマツコに紹介している)

マツコ: あ、でもあたし、燻製強いほうが好きかも。《主張》

ゲスト: 嬉しい。《感情表出》

マツコ: え? 《陳述要求》

ゲスト: 煙が好きな人が好きなんですよ。《主張》

マツコ: 婿養子に完全に、あたしペースにはめられてる? 《陳述要求》

ゲスト: いえ、そんなことはないですよ。《陳述》 (マツコ)

B: (a)状態の変化の結果を表す副詞群(仁田 2002)(かちんかちん、がりがり等)

(b)事物の様子、現象を表す擬態語(べたべた、すべすべ、もちもち等)

(11) (夏に暑い中友人同士が一緒に歩いていて)

A: 汗かきすぎてべたべたー。

B: 涼しいところ入りたいね。

形容詞語幹による感情表出型での独話的対人発話は、目上の人間の話に対して発することで、聞き手の話に対する共感、理解、納得などの発話態度を、生き生きとした感覚のまま直接的に伝えることができる表現である。話者の感覚・情意の心内発話をそのまま表出することで、感情を明確に伝えることができる。さらに、それにより聴者の共感を誘い、会話参加者の主観的感覚に同調することもできる。ポライトネスの原理のうち、共感の原則(b)自己と他者との共感を最大限にせよというものにあてはまるものであり、感情表出型の独話的対人発話がポライトネスに則ったものであることがわかる。

#### 4.1.6. 陳述型

陳述型は、目の前の状況を描写して聞き手に何らかの行為を要求する表現として使われる。

A：現象描写

(a)「あれ」「あ」などの間投詞を伴い眼前の状況を描写し、共同注意を促す。

(12) (恋愛相談をしている場面で、菅谷が気にしている女性が帰ってきた場面)

菅谷：お、来た。《陳述》

中津川：来た。《陳述》

(やや沈黙があり)

中津川：(菅谷に向けて) 髪型大丈夫？《陳述要求》

(菅谷が髪型をなおす)

(テラスハウス)

この会話では、菅谷の「お、来た。」という発話により、中津川も女性に気づき、相談が中断され、別の話題を話していたように振る舞い始める。共同注意を向けさせることを、話者が捉えたものの共有、共感、注意を向けさせるための要求であると捉えると、共有や共感ポライトネスの原理にあてはまる。また、注意を向けさせる《要求》であると捉えると、その要求に伴うFTAを緩和させるためのネガティブポライトネス・ストラテジーとして用いられていると考えることもできる。

(b)経験したことや眼前にあるものを描写し、話者の感動や感情を伝える。「のだ」や副詞を用いることもある。

(13) (油の専門家が勧めるオリーブオイルを味見して)

マツコ：うわー、これけっこうオリーブの実そのまま。《賞賛》

(マツコ)

話者の目の前の状況または状況を作り出した聞き手に対する不満表明、驚きなどの感情を表すことができる。(a)の場合、終助詞を用いず独話形式で発話することで、たとえ聞き手が不満表明を聞き流す、あるいは無視をしても対人関係に大きな影響を及ぼさない。この例では、賞賛する対象の事物を詳細に描写することで、話者の感動、感覚を聞き手にはっきりと伝えており、賞賛を強調する発話となっている。これは、ポライトネスの原理のうち、是認の原則(b)他者への賞賛を最大限にせよというものに該当する。

B：繰り返し

繰り返しは、発話機能としては主に《言い直し要求》にあたるものであるが、会話参加者の発話の一部をそのまま繰り返して述べるのみの形式であることから、陳述型に分類した。

(14) (初対面の10代から20代の男女の会話)

中津川：握手会ってどうということ。《陳述要求》

竹内：AKBの。《陳述》

中津川：あ、AKB。《陳述》

湯川：AKB。《陳述要求》

北原：あ、そうです、AKB48の一員なんですけど。《陳述》

中津川：一員。《陳述要求》

北原：端っこのほうなんであんま映ないですけど。《陳述》 (テラスハウス)

この会話では、文脈から、不十分な情報を補ったり、話者が当該の命題内や話題について理解が及んでいない場合に説明をしたりなどといったことを要求している。しかし、疑問形式で直接問いかけるのを避け、不確かな情報の詳細な説明や説明のしなおいを求める

ことで、言い直しや情報の提供、陳述などを要求する際の FTA を緩和していると考えられ、ネガティブポライトネス・ストラテジーとして用いられている表現と言える。

#### 4.1.7. 納得を表す表現

以上 6 つの分類には属さないが、納得を表す独話的対人発話がある。ここに分けられるのは、「なるほど、そうなんだ、へえ」などの、驚き、意外性、納得など命題に対する話者のとらえ方を表す副詞群（なるほど、たしかに、そうか、まさか、やはり）である。

ここに分けられるのは、「なるほど、そうなんだ、へえ」などの、相手の発話内容に対する話者の態度を表す副詞類である。

(15) (金魚の専門家が、金魚の種類について解説している中で)

ゲスト：これからどういう色になるかという楽しみがあるわけです。《陳述》

マツコ：(金魚を見ながら) なるほど、最初はどういう色になるかわからないわけだ。  
(マツコ)

目上の人間に対する直接的な賞賛が独話的形式で行われるように、「なるほど」系独話的対人発話も、「私はあなたの言っていることに納得している」ということを、話者の率直な感情として伝えることで、聞き手の発話内容に対する同意や賛同、感嘆の意を強調して伝えることができる表現であり、ポライトネスの原理のうち、共感の原則(b)自己と他者との共感を最大限にせよというものに該当する表現であるため、ポライトネスの原理に沿った表現形式であるといえる。

#### 4.2. 考察のまとめ

ここまでの考察から、独話形式の発話が聞き手存在場面で発話されることで、対人機能をもつ発話となり、様々なコミュニケーションストラテジーとして用いられていること、さらに日本語母語話者どうしの会話の中で日常的に用いられる表現であることが明らかとなったといえる。以上の考察は、次のようにまとめられる。

- I 独話的対人発話には、ポライトネス・ストラテジーとしてのものと、それ以外のコミュニケーションストラテジーとして用いられているものがある。
- II ポライトネス・ストラテジーとしての独話的対人発話は、①聞き手に対して何かを要求する際、要求表現を用いることを避けながら目的を達成し、かつ当該の目的に応じるかどうかを聞き手に委ねるものと、②聞き手に対する評価を独話的に発話することで、FTA を回避しながら賞賛を行うことができるものがある。
- III それ以外のコミュニケーションストラテジーとしての独話的対人発話には、感情表出などを独話的に発話することで、話者の感情や感覚、賞賛などの意をありのままに述べ、聞き手との共感をはかる。

表 1. 独話的対人発話の分類

文法上の分類	文法形式	代表的な機能
I 自己確認型	終助詞「か」	間接的な質問
II 意志表明型	動詞意向形	間接的な許可・承認要求
III 願望表出型	願望・仮定	間接的な依頼・許可要求・主張
IV 評価型	形容詞（語幹）	賞賛の強調
V 感情表出型	形容詞（語幹）	他者との共感
VI 陳述型	名詞・のだ・動詞など	共同注意・賞賛の強調・共感など

## 5. 課題と展望

本研究では、先行研究で取り上げられていない表現形式のものを含め、総括的に独話的対人発話の機能と条件を整理・考察した。これまで独話とされてきた発話のうち、聞き手を意識したと思われる発話について、「独話的対人発話」という一つのコミュニケーションストラテジーのカテゴリーとして総括的に考察したことに本研究の価値があると考えられる。

しかしながら、現段階においては、「なるほど」「たしかに」のような納得を表す表現や、陳述型独話的対人発話など、考察不十分な面があることは否定できない。本研究で考察が不十分であった表現の機能の考察、パラ言語的要素を考慮した形式の調査などを行い、さらに総括的かつ体系的な独話的対人発話の考察を行い、考察を深めたい。また、独話的対人発話の日本語教育への応用の価値や具体的な応用方法を、さらに提示する必要があると考える。

## 注

- (1) 三牧（1993）は、疎遠表現を＋、親密表現を0と表記している。
- (2) 特に記述がないものは、実際の会話例を記録したものを使用した。
- (3) 『日本語文型辞典』609-611、『日本語文法ハンドブック』136 参照。

## 参考文献

- 池谷知子（2012）「終助詞『っと』『つけ』の機能—『っと』『つけ』で表現される私的領域内情報と目に見えない聞き手—」神戸松蔭女子学院大学紀要 言語科学研究所編 No15,11-25
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662号,27-42
- 飛田良文・浅田秀子（1995）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 中川祐志・小野晋（1996）「日本語の終助詞の機能—「よ」「ね」「な」を中心として—『自然言語処理4』6,3-18
- 中崎崇（2002）「独話場面における終助詞『ヨ』の機能」日本語・日本文化研究（12）105-115 大阪外語大学日本語講座
- 仁田義雄（1992）「言表態度の要素としての〈丁寧さ〉」『日本語学』10（2）67-75
- （2002）『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版

- 野田尚史 「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」 『国語学』 194号 102-89
- 福島恵美子 「ビジネス関係者のスピーチレベルシフトの要因について—初対面二者の会話から—」 『早稲田日本語研究 17』 早稲田大学日本語学会 59-70
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」 『大阪教育大学紀要 第I部門 第42巻 第1号』 39-51
- (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—『働きかけ方式』のポライトネス・ストラテジーとして—」 『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 第4号 37-53
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』 くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現』 明治書院
- Brown, P. & Levinson, S (1987) *Politeness –Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman. (邦訳：池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』 紀伊國屋書店)
- Maynard, Senko K. (1991) Pragmatics of discourse modality: A case of da and desu/masu forms in Japanese. *Journal of Pragmatics* 15 551-582. North-Holland
- Searle, J.R (1969) *Speech acts*, Cambridge University Press
- Searle, J.R. (1975) “A taxonomy of illocutionary acts”, *Language in society*, 5, 1-24
- Searle, J.R. (1979) *Expression and meaning: Studies in the Theory of Speech act*, Cambridge University Press. (邦訳：山田友幸監訳 (2006) 『表現と意味』 誠信書房)
- Usami Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation - Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. HITUZI SYOBO

#### 参考辞書・辞典

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2008) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2008) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- グループ・ジャマシイ (2005) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』

#### 用例出典

- 名大会話コーパス
- マツコの知らない世界 (TBS テレビ)
- モヤモヤさまぁ〜ず (テレビ東京)
- テラスハウス (フジテレビジョン)

#### 参考資料

- NHK 放送文化研究所 HP <http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/124.html> (閲覧日：2015年1月9日)

(吉野和美、創価大学総合学習支援センター助教、ksakurai@soka.ac.jp)